

---

# Stragglers Party

榊屋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Stragglers Party

### 【ZPDF】

Z0210X

### 【作者名】

神屋

### 【あらすじ】

この物語に『主人公』はない。この物語に『仲間』はない。この物語の『結末』は知らない。この物語を『描く』ものだけがそれぞれ存在している。『自分』が様々な謎にそれぞれの形で立ち向かう。これはそんな物語だ。ネタバレの危険性があるため、序章が終わるまであらすじは意味の分からぬ感じになってしまいます。申し訳ございませんが、しばらくお待ちください。

## 1話 表面上の奇跡

僕はいつも通り学校へ向かう。3月22日。高校受験も3日前に結果発表され、本当の意味で終わり、卒業式も明日と迫っていた。学校は僕の家から自転車で約5分。

学校についた。

本日は卒業式のリハーサル（リハーサルって何だよ。僕らの卒業は1回だけだぞ！なのに先生達はどうして俺達にリハーサルなんてことをやらせるんだ。大体、僕らはそ【省略】えーっと、何の話だっだけ・・・・・・？

ああ、そう。

リハーサルのため、荷物はそんなに多くない。僕は荷物を机の上に置いて、ポケットの紙を確認した。

「よし・・・・・・

「何が『よし』なんだ？」

と、そこで友達が来た。僕は焦つてポケットに紙を入れる。

僕の幼馴染で、気さくな態度で誰とも仲良く出来るという才能を持つ、高校生活に不安なんてなさそうな、校則をしつかり守った髪形の、運動神経トップクラスで成績はトップ、名門高校を受験した生徒会長である、針葉陽一様だ。

「長い」

と、僕は理不尽に呴いた。全く。もつと平凡な人間であれよーと、責任転嫁している僕を見て、針葉は不思議そうな顔をして、

「何か忙しそうだな

と笑つた。

「そういや

と、眼鏡の位置を戻して（優等生＝眼鏡という偏見は離れないのか。悲しきかな）、針葉は言った。

「裏、かさね高校受験しなかつたんだって？」

襲というのは僕の名前だ。女みたいで、あまり氣に入っていない。

「まあな」

「どうしてだ？ 働かないといけない状況にでもなっちまつたのか？」

「姉さんと2人暮らしだし・・・・・・」

「姉さんつて・・・・・・」

「ああ、悪いな。昔からの癖だ・・・・・・。で？ どうなんだ？」

「別にそういうんじゃないんだけど・・・・・・」

「僕は一度撤回してから、言うべきか否かを考える。

・・・・・・うーん。

「実は、高校に行くんだけど、この辺の地域じゃないんだ」

「つてことは、推薦で行くのか？」

「どうだろう。授業料免除、全寮制で教科書とかも無料らしい。金は全く掛からないから両親は了承しているし、姉さんも『さつと行け』ってさ」

「僕は笑つてそう言つた。

「あの人らしいな」

針葉も笑う。

「まあ、これはどっちかというと招待つて感じだな」

「そうだよな。お前は部活には入つていないし、勉強も言つほど出来ないしな

・・・・・・はつきり言つてくれる。

ま、否定できないわけなんですが。

「そうだ、針葉」

「何？」

「最近、世間で話題になつてている暴力事件知つているだろ？」

「・・・・・・ああ」

「暴力事件。

正確に言つならば、暴力致死事件。

「あれつて何件目だつけ？」

「あ・・・・・・確かね」

針葉は思い出すように額に指を当てた。

「昨日、17人目が死んだって今朝のニュースで言つてたよ  
・・・・・へえ。

「あれつて、無差別殺傷事件の延長なんだろ?」

針葉がそう言った。

無差別殺傷事件。

数ヶ月前からこの街にのたまつてゐる、謎の殺人鬼。

最初の事件は、老婦だった。1人の老婦が家の前でナイフで刺されていたそうだ。

その事件がニュースで取り上げられたのは1回のみ。その後は、一度もその事件は取り上げられなかつた。

その後、会社員、主婦、ヤクザ、学生、ホームレスなど様々な人間が殺されたが、それぞれの事件は一度ずつしかニュースとして取り上げられては居ない。

しばらくして、その事件に噂が流れた。

『その人々を殺したのは、殺人鬼ではなく警察の上位の人で、事件を取り上げる事は出来ない』

という内容だった。

それは、なるほど納得できる理由はある。  
しかし

「途中から殴殺に転向したのは不思議だよな」

僕はそう言って、針葉に同意した。

「どうしてだと思う?」

僕は針葉に訊いた。

「分からんな・・・・殺人鬼の気持ちは僕には」

「そうか? 天才なら分かるんじやないか?」

「別に天才じやないよ」

苦笑いで・・・・しかし強い口調で針葉は言った。

「そうか。何か悪かつたな」

「いやいや」

そう言つて針葉は笑つて、事件の話を打ち切つた。  
まあ、彼も暇つぶしにはなつただろう。

どうせ明日には皆忘れる話だろうし。

チャイムが鳴つたので、教室に入つて先生の話を聞い(て)いる振りをして、体育館で卒業式のリハーサルを終わらせた後、針葉を家に誘つた。

「いや、今日は止めておくよ。姉さんによろしく伝えてくれ

「お前の姉さんじやないだる」

「そうだね。えっと・・・・・・

「美雪だ」

「そう。姉さんによろしく

「直つてない!!」

と、ぐだぐだな会話をしてから帰途に立つた。自転車だけれど。  
走る。

思い切り漕いだ。

なんとなく、ストレスを発散するよう。走るよ。

気分はスカッとする。

そう、いつもの夜のよう。

家に着く。

「ただいま」

返事は無い。

僕はリビング横の座敷に入り、祖父母の仏壇に手を合わせる。

「・・・・・」

僕はやはり、父さんの息子なのだろう。ねえ、じいちゃん、ばあちゃん。

誰も何も答えない。

僕はそのまましばらく座りて手を合わせていたが、部屋の古い時計がボーンという音を立てて響く。

時計は3時を指していた。リビングのソファーに転がって、テレビを点けた。

「・・・・・」コースはまだやつてないか

昔見たドラマの再放送をしていた。

だとすれば休憩しますかね。

「ただいま」

という声で目が覚めた。

ああ、寝てしまっていたのか、ということに気が付いた。

「もしかして寝てた? テレビの電気がもつたいないよ  
姉が声を掛けつつ、そして冷蔵庫の前へ。

「寝てない

「あんた、昨日の夜遅くも出かけてたでしょ?」

聞いてないな。ていうか知つたのか。

「殺人鬼だか暴力男だか分かんないのが、うろついてんだから氣をつけるように」

そう言つてー? サイズのペットボトルのお茶を飲み始めた。

「姉さん・・・・・」

「何？」

「…………本当に高校行つていいの？」

「いート。無償でしょ? 他ひとにつけマジ」

志しきなし

102

娘は間抜にな声で応戦した

「ええが、ムサシノ一郎、

「でも彼氏もいな「殺すぞ」

「はい、すいませんでした。包丁を下ろしました」

卷之二

何とかしないと。

姉はそれだけ言つと2階に上がつていつた。

時言を見る

6時たら  
一まり3時間余り寝てしたらしい  
ショック。

『本日、15時頃、1人の男性の殴殺死体が発見されました』

15時・・・僕が寝始めた頃か。

『 昨夜の未明頃、殺害されたと思われ、以前からの無差別殺傷事件と同一犯で、これで被害者は17人目と警察は発表しています・・・

・・・』

その後、キヤスター や『メンテーター』が事件について話し始めた。どうも人気のないところで殺されたらしく、偶然通りかかった高校生3人のグループが見つけて通報したそうだ。普段は通らない帰り道で、もし通らなかつたら気付かなかつただらつ、といふことらしい。

「さてと」

僕は咳いてから立ち上がり、2階に上がって仮眠を取る事にした。テレビを切るのも忘れずに。

階段を上がって自分の部屋の前に、そしてドアノブに手を掛けた。

「襲

と、隣から声が上がつた。

見ると姉が自分の部屋から顔だけを出してこちらを見ている。

「夕飯は?」

寝ようとしていることがばれているようだ。

「起きたら食べるから適当に作つといへ」

「コンビニ弁当でいいか?」

「作つとけ!」

俺は姉を叱咤してから、自分の部屋に入った。

部屋はがらんとしていた。

荷物はほとんどまとめられ、寝るのはロフトなのでベッドもなく、あるのはもう使うことも無い学習机と椅子だけだった。

「・・・・・・」

僕はポケットから紙を取り出して、机の上に置いてからロフトを上がる。そして布団に横になつてから携帯電話を開く。

「・・・・・・・」

トップニュースでは、『現代のねずみ小僧』といふ見出しが『オーケション 全て贋作』というものがあった。もちろん、僕らの地域の『連續殺傷事件 17人目』というものもあった。世の中、犯罪に満ちてゐるなあ。

思いながら連続殺傷事件の記事を見る。

「今までナナイフで14人だつたが、19日以降、殴殺に転校した。

・・・・・か

呟くように読み上げる。

まあつまり殴殺死体は3人といふことか。

ということは事件は殴殺死体は3日前から1つずつ作られているわけだ。別に無差別殺傷事件をここまで取り上げる必要はなかつたんじゃないだろうか。だつて、どうせ数年後には何の問題もなかつたように表舞台から消えるのだから。

さて、眠りに入ろう。

♪♪♪♪♪・・・・・。

と、アラーム設定しておいた携帯電話が、音とともに震え始めた。時間は12時。

・・・・・よし。

隣の部屋・・・・・姉の部屋の扉をノックする。

返事は無い。開ける。

居ない。

1階へ降りる。誰も居ないし、飯も無い。

計画通り、結局はコンビニに行つたのだろう。僕と一緒に今まで寝ていたであろうことは容易に想像できる。

「・・・・・やっぱりなあ

僕は自分の部屋に戻つて着替える。黒いパークーとジーンズに身を包む。

「・・・・・姉さんは楽にしてあげないとな

僕は自分の学習机の中からナイフを取り出した。

父の名前が柄に刻まれているナイフだ。元々はふたが存在してい

なかつたそつで、父が蛇の皮のよつなもので作つたナイフカバーに入れてある。取り出して刃を見る。研いであり、鋸なんて1つも見当たらない。

準備完了、計画を遂行しよう。

「つと・・・・・・」

部屋を出ようと足を向けてから、机の上に置いておいた紙をポケットに入れた。それから今度こそ部屋を出た。

家を出で、コンビニの方向を見る。

月が無い空で星の光を感じる。

「・・・・・行つてきます」

今行くよ。

楽にしてあげるからね。

姉さん。

## 3話 月無き夜に、星に願いを

## 月の無い夜。

その田舎町で、人も車も見られない中で僕を含めた2つの影が走り続ける。

業は静かに前進

「ハア・・・・ハア・・・・」

卷之三

僕は強くナイフを握り締める。そして息切れしないよくな全力で追いかける。そのくらいの呼吸法は知っている。僕は頭はいいのだ。体力もある。

しかし、向こうもなかなかにしぶとい。女にしては体力がある。僕と同じ運動方法を取つていないのでから、凄まじい体力だ。

「シンヒーからの帰りだった。そのときには声を掛けた僕を見て見ただけで、逃げ去つていった。まだナイフも出していなかつたのに、だ。相手を殺人鬼だと気付いて逃げ出した神経のすばらしさ。未恐ろしい女だ。

殺したいほど。

苗代山房詩

僕はフードを深くかぶりなおした。

氣付くと田舎町では、まだ都会部に値する地域に到着した。

夜中に外に出ようなどと考える者が居るはずも無い。のに、僕は連続で人を殺すことができている。

だって物好きな奴が居るんだから。だから僕は止まれないのさ。路地裏に入つたその「物好きな奴」を見て、スパートを掛ける。そしてそこで追いつくことに成功した。

一  
かまいた

— < . . . . . ! —

— ● ● ● ● ● ●

僕はその顔を殴った。女は飛ぶように奥へ吹き飛ぶ。

—  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•

僕は自分の拳を見直す。

当った感触の割りに、向こうにダメージはほとんど無こもつた。

やに凄い女た

ナイフを持ってきておいて良かったようだ。

僕はまだ倒れ伏している対象に向かってナイフを突き立て

「！？」

腹部に強烈な痛みと衝撃が走った。

そのまま数ストップで転がして配水管のホースは背中をぶつけ止まつた。

11

そりは世界がアーティストをかぶせて立てていた

「ナシナ、逃げ口 恐い<sup>タメ</sup>」

サトウ遊口

変声期の男の、なまけを出して、女を見ね

「...」

「悪イナ。アレヲ殺サセルワケニハイカナインダヨ」

11

「アレハ僕トハ違ツテ表立ツテ強イワケジヤない」

声が戻ってきたのだろうか、男はもう一度口にそのスプレーを入

「…………ヨシ。デ、アレハソノキニナレバ何デモ殺スト思ウケド。」

「僕ハソレヲヨシトハシナイ」

「聞くのも無駄だ。」

「僕はそう判断して走り込んだ。そしてナイフを胸部に突き立てようとした腕を伸ばす。」

「諦メロ」

「君はそう言って、そのままナイフを右手の人差し指と中指の間にで掴みとった。」

「！」

「コイツはヤバイ。おかしい。」

「普通の運動神経や握力、そしてこんな状況に即応してナイフを掴むなんて……普通は出来ない。こいつは普通じゃない！」

「と思った瞬間。空いていた左手が僕の腹部を殴ってきた。そしてそのままナイフを抜き去り、右手で頭を押さえつけられて、地面に仰向けに倒された。」

「後頭部に強い激痛が走った。」

「才前ニナイフヲ使ウヨウニ仕向ケタ。才前ハ氣付イテイナイダロウナ。デ、才前ハ使い方を知らない。ナイフを使つたとしてもナイフを使ったからこそ、僕にお前が勝てる事は無くなつたということだ」

「声が戻った。」

「そして氣付いた。」

「コイツ……！」

「お前の動機は理解しているつもりだぜ？殴殺死体が出来上がり始めたのは、合格発表の当日……つまり、3日前だ。その日以来、1つずつ死体が出来上がっている。……ここまで言えば、誰にでも分かると思うぜ？ なあ！」

「そう言って僕を見下ろして、フードを外した。」

「そして僕の名前を呼ぶ。」

「針葉」

「……襲<sup>かさね</sup>エ！」

「どうじうじことだ！うしてコイツが……！」  
ともかく現状回復だ。

僕は馬乗りになつている襲を蹴り飛ばした。そして距離をとつた。

「……」

何から喋ればいいのか、と思つてゐると。  
「まず」

と、向こうから話を始めた。

「動機は『受験失敗』だ。受験に落ちた腹いせに、他の成功した奴らを殺すことでストレス発散しようとしたんだろう？警察は無差別殺傷事件の続きだと思つてゐらしいけど、そうじやないことは俺がよく知つてゐる」

襲は笑う。

そして僕を指差した。

「犯人はお前だ」

まるで探偵のような振る舞いだ。

「探偵……？僕はそつちじやないよ。どちらかといえばお前側だ」  
僕側……？

「ともかく」

襲はそう言つて話を区切つた。

「お前は難関高校を受けて落ちた。いつも天才って言われ続けたプレッシャーとそれによるストレスが爆発した。それでその夜、1人目の男を殺した」

「……」

「何で怪しいと思つたか……それは主に勘だ。お前が犯人じやないかと思つて、お前の発言の一つ一つを注意して耳を傾けていたのさ。そして今日……いや、もう昨日になつてゐるな。昨日の学校での話に矛盾を発見した」

襲はニヤリと笑つた。

何だ。

## 僕は何を失敗した

「3つ目の死体が発見されたのは今日の昼だ。なにお前は朝から知っていた。つまりお前は17人目が死んだのを何故か知っていた。朝は鵜呑みにしていたが、昼になつてようやく全てが繋がつたんだ」

「ジル う可アリ」通假ソナハツノハツニ  
僕は死体を見たがけた

「じゃあ何で通報しなかったんだ? どうして夕方まで人が現れないような道を使って登校して来たんだ? 何で、ニュースを見たって嘘をついたんだ?」

何か。

僕はそのまま襲に突っ掛けた

しかし襲はそんなものを譲共しないよ~~に受け流した~~そのまま今度は額を地面にぶつける。  
僕は必死に襲の方に向き直った。

但し少死に尊の方に回さ直す  
するべ先ほゞ同様一處は業を

「すると先ほど同様に、裏は僕を見ておいていた。」  
「全てが指すのは『お前』犯人』といふ等式だけだ。

襲は僕を指差した。

「お前に学校でLRの話をしにプレッシャーをかけて、娘を困に

使ってみた

「姉さんを化け」

かつた。  
化にしていたのか……しかし、事情を知っていた風な感じではな

「昔からの付き合いだからな。姉さんもいつもと違ひ雰囲気をお前から感じていた。殺氣を感じ取ったんだよ。姉さんは、そういうの

に敏感だから」

だからこそ、何の説明もせずに匂に利用したんだけれど。

襲はそう続けて、僕を睨んで「あと」とさらに続けた。

「姉さんはお前の姉さんじゃない」

「悪いな。家族ぐるみの付き合いだったから、無意識だ」

僕はそう言って静かに立ち上がった。

「初めて会話が成立したぜ」

「もう諦めたんだよ。警察でも何でも呼べ」

襲をそう言つて突き放つ。現状にのつとれば、本来の意味で突き放されているのは僕だが。

しかしここまでバレているのなら、もはや無意味だらうといつ判断の発言だった。

のだが。

「はあ？」

襲の発言は僕の望むべきものではなかつた。

「お前は捕まえない。姉さんを守るためには、殺人鬼のいる町として治安を守るべきなんだよ」

「……？」

確かに、今こうして殺人鬼がいる街並は、その殺人鬼を除けばとても平和だ。

だが。

それはつまり、僕を逃がすという事か？

「つーわけだ」

そう言つて襲は僕から奪つたナイフを僕の前に投げた。なるほど。どうやらそういうつもりらしい。

「！－！」

僕は落ちていたナイフを取ると同時に後ろに下がった。襲の手の中で何かが光つたのを見たからだ。

「ばれたか」

そう言つて堂々と襲はナイフを光らせた。

「お、お前……」

「お前には死んでもらひづぜ」

何言つてんだコイツ……。しかし、襲の田は本氣で、ナイフをしつかり握っているのが分かる。

待て。

よく考えればおかしい。

何故、コイツは僕の前に現れたんだ？犯人だと分かっていて、かつ、3人も殺しているような奴を相手取るなんて、いくら姉さんを守るためとは言え、無謀すぎる。

そして。

そして何故。

何故僕はコイツを恐れているんだ！？

「く……来るな！」

咄嗟にナイフを前に突き出して距離をとる。

「ど、どうして僕を殺すんだ！」

「動搖したな？弱味をみせたら殺人は負けなんだぜ」

「僕が生きていないと殺人鬼は居なくなる！今みたいに治安は守られないぞ！？姉が守れなくなるんだぞ！？」

僕の発言に襲は

「まだ分からぬのか。だからバカなんだよ」

と笑つた。『バカ』という言葉が僕の胸に思い切り突き刺さる。その所為か、急に冷静さを取り戻した。

そして走馬灯。

僕と襲、そして姉の3人での楽しかった日々が思い出された。

『警察は無差別殺傷事件の続きだと思ってるらしいけど、そうじゃないことは俺がよく知ってる』

先ほどの襲の言葉が急に思い出された。

ああ、そうか。

そういうことか。

「殺人鬼はお前じやない。お前の前に居た本物だ」

その声で僕は現実に戻された。  
襲はそう言つて。

僕に逃げる隙も与えなかつた。

僕は針葉の首からナイフを抜いた。未だ、鮮血が流れている。噴水のように、とまではいかないが。

「ハハハ……」

僕は静かに笑う。

ピリリリリ……と、何の設定もしていない携帯電話が悲しく鳴る。ポケットの中から携帯電話を取り出す。

『如月 魅了』

と書かれていた。

『もしもし? 大丈夫なの?』

「……終わった。ちゃんと」

僕はそう言つて静かに通話を切つた。

続いて、

テロリロリーンという雰囲気にそぐわない陽気な音でメールを受信した。

「……」

ニュース速報だつた。

「へえ……」

画面には「死宣告、8人目の殺人」という見出しがつた。

死宣告。この地域ではない場所で最近、騒がれている殺人鬼だそ  
うだ。

「会いたいもんだな。僕と同じ殺人鬼さんに」

僕はそのままポケットに携帯をしまい込んで、代わりに、入れて  
おいた紙を抜き取る。

『如月襲殿 あなたの入学を心よりお待ちしております。 後世

紙にはそう書かれてあつた。

「行こうか」

誰に言うでもなく、星だけの孤独な空を見上げて僕は呟いた。  
照らす月もなく暗がりの中を静かに歩いた。

### 3話 月無き夜に、星に願いを（後書き）

序章 A m u d e r o u s f i e n d

編は終了です。

次は序章 A h i e r d k i l l e r

編です。

## 1話 宣告

死宣告。

それが俺についた異名だつた。  
テレビのニュースで放映されている通りなのだが、説明をしてお  
こう。

おもに警察が発表している情報から抜粋しつつ俺の言葉で説明し  
よう。

死宣告と呼ばれているのは当然理由がある。

俺は殺すと決めた相手に、『あなたを殺します』と宣戦布告する  
のだ。

宣告された相手は圧力に耐えられず逃げ惑う。

それを追い詰め、追い駆け殺す。そして最後に、殺した者の血液  
で『宣告通り』と死体の横に書いて完了だ。殺し方は『バラバラ殺  
人』だ。しかも腕や出欠の状態、断面などから、生きた状態でバラ  
バラにされている。

当然こんな大きな事件を起こせば、誰かが何らかの目的で残酷な  
犯罪行為を行つてゐる、と誰もが思うものだ。事実、そう思つてい  
る者が多い。

ということは一つの疑問が浮かんでくるはずだ。

『何故、死宣告は人を殺すのか』

つまるところ、目的 動機だ。

警察もそれを追つてゐるようだが、いくら探しても動機が一つも  
出てこない そうだ。

明らかに怪しい。何らかの理由づけくらいできるはずだ。どこか

しら共通点が見つかるはずだ。なのにそれすらも発表していない。さらに言えば、被害者の名前と顔を明かすことをマスコミ各社に禁じていいようだ。しかもかなり強い圧力で。

警察も困っているのだ。

つまり、わからないのだ。

警察は犯人が何を考えているのかもわからない。

まあ俺の考えていることがわかるものなど、この世にいるはずもないのだが。

「さて」

前置きは「このくらいにしよう。

3月22日18:00現在。

俺は今、ある中学校の前にいた。

名前は……忘れたが、まあ大丈夫だろう。下調べも何もしていな  
いが。

別の地域には17人も殺人を犯している殺人鬼がいるらしいが、  
この街にはそんな大罪を犯している者はいない。

俺を除いて、だ。

俺は堂々と入り口から入つていった。

警備員もいない学校だ。まあどの学校にでもあるわけではないし、  
仕方がないといえばそれで終わりだった。

俺が殺人を犯す理由。

それは人が絶望したときの表情を見るのが楽しいからだ。

人は未来が見えていないこの世界でも何らかの形で希望を持つ  
いる。その希望をすべて無 それどころかマイナスにまで持つて  
いくことが成功すれば、俺はそこに快感を感じるのだ。

閑話休題。

どの学年のどのクラスを狙うかも決めてこなかった。  
で、ふと体育館を見てみた。

見たところ卒業式が近いようすで、体育館にはそれらしい準備がされていった。

ふむ……。

卒業して高校に入学しようところへ、希望に満ち溢れているに違いないな。

だから、3年生を狙うことにしよう。

「見学の方ですか？」

学校の先生だらう青年が後ろから声をかけてきた。

「ええ、息子の入学校にどうかなと思いまして」

「（）自由に見ていいってください。この学校は見学自由ですか？」

そう言って青年は俺の横を通り、前へと進んでいった。

笑顔だった。が、なんだか……。

違和感を感じさせめるような笑顔だった。

「ああ……それで」

俺はつぶやく。

道理で無防備な学校だと思った。

つらぢゅるしていっても何ら問題ないとこいつ」とか。

と、すれば。

「あの、すみません」

俺はできるだけフレンドリーに、怪しまれないように声をかけた。

「3年生のクラスはどうですか？」

「ハア……ハア……ハア……」

日は落ちて、空はほとんど暗くなっている。  
もうすでに、1時間近く走り続けている。

振り向く。

まだ影は俺を追い続けていた。

「何なんだよ……！？」

何故だ。

どうしてこうなった。

俺は。

俺はどこで間違えた！？

2階。

3年生の教室はその階にあるとその青年が言っていた。

「今日が卒業式でしたから……他の生徒はもう帰っていますが、3年生だけまだ残っています。担任の教師の話や生徒同士の別れの言葉とか……いろいろあるんですよ」

それだけ伝えて、1階にある『職員室』に入つていった。

終始、何か含むところがありそうな笑顔だった。

なるほど。卒業式が近いのではなく、今日が卒業式だからそのままで形が残っていたのか。

となると、3年生よりも2年生を狙つ方が希望をつぶすのには良いのかも知れないけれど……どちらにせよ対象は3年生だ。だって3年しかいないんだもん。

俺は自分のジャケットの内側のポケットを確認する。

銃が1挺とナイフが1本。

ただの中学生の人生くらい簡単に終わらせることができる。

俺は2階に向かおうと、階段の方に足を向けた。

「ん……？」

階段の横にエレベーターがあつた。

別にエレベーターを使おうと思つた訳ではない。

エレベーターの前に車椅子に座つた少女がいたからだ。

「こんにちわ」

少女は笑顔を浮かべて俺にあいさつした。

先ほどとは違つて、自然な笑顔だつた。

「……こんにちわ」

俺がそういうと、エレベーターに乗り込んで上に上がつていった。

「……」

あれもきっと3年生なのだろう。誰も車椅子を押してあげるような人間はいなかつたことに多少違和感を感じたが、そういうこともあるのだろう。だからそれ以上気にも留めなかつた。

エレベーターは2階で止まつた。まあ、残つているのは3年生か先生なのだから当然といえば当然だつた。

「……」

あの少女も殺すことになるのだろう。

別に希望を持つた人間しか殺さないわけではないのだけれど、未来に希望を持つていそうにない奴までも殺したいのかと問われれば俺はこう答えよう。

殺したい。

「さてと」

俺はつぶやいてから階段を昇つていった。

2階に上がると、その階は少しづわついていた。俺が高校生だつた頃も同様な状況だつた気がするし、気持ちはわかる。が、お前ら

はそれ以上のざわつき　『動搖』を得ることになるんだぜ。

目の前の教室の後ろの扉に手をかけた。

思い切り開ける。

開けた瞬間、ざわめきは一度静けさに変わる。先生も生徒も俺を見て、まずは疑問を持つはずだ。

「誰……？」

誰かがつぶやいたような気がする。

それを合図にするように、俺は銃を取り出した。

世界は常に変化している。この空間だって例外じゃない。

ざわめきが静けさに変わり、次の瞬間には

「きやああああああああああああああ……！」

それは戦慄に変化していた。

一人の女子生徒のその叫び声で皆がはつとしたりに動き始めた。男子も女子もそれぞれ悲鳴や狼狽のよつた声を上げて逃げ惑つている。それでも落ち着いたように対応して、全員が俺から離れて行こうとする。

パン！

と。

銃声が響いた。もちろん俺の銃が火を噴いたのだ。黒板に弾丸が突き刺さっている。

「動くな」

俺は一言だけつぶやくよつに言つた。それだけで空間はまたも静けさを取り戻し、動きも止まつた。

支配感。

何と言つのだろう……恐らく天下統一した豊臣秀吉や徳川家康はこういう気分を味わつていたんだろうな、と感じた。

「さてと……」

誰から殺そうか。

見たところ男女に差異はない。頭のいい奴か人望の厚いやつを殺

そうと思つてきたのだが、はてさてどうしたものか……。  
そう考へたのだが。

「逃げなくていいんですか？」  
斜め下でそうこう声がした。

「……！」

何かと思へば、先ほどの車椅子の少女がいたのだった。  
入つてきた瞬間に、恐るべく田の前にいたのだらう。しかし氣づく  
ことができなかつた。

いや そこじやない。

「何がいいたい」

俺は質問した。

少女はまっすぐ俺を見つめる。

周りの生徒たちはその状況を見て、そわそわしたりびくびくした  
りして、落ち着いていない。

それに対しても、俺に発言しててきた少女はこちらが驚くべうい落ち  
着いた対応だつた。

「答える、何が言いたい」

「……」

少女は黙つて自分の耳を2回ノックした。

耳を澄ませ、といふことか。

その時小さく音が入つてくる。

ウー……ウー……、と。

「け……警察……ー？」

何で……。

いくらなんでも早すぎる。

いや 勘違いだ。これは別の場所へ向かつてゐるだけで

「あれは間違いなく、ここに向かつていますよ」

堂々と少女は怖がることもなく、俺に向かつて言つ。

「どうこうことだ」

弱味を見せるわけには行かない。俺が殺人鬼である以上、弱いところを見せることは敗北を意味することになるのだ。

「私が連絡しましたから」

そう言つて少女は特にそれを誇るでもなく、静かな目をして俺を見ていた。

その発言によつて空気が少し緩んだのを感じた。

周りの生徒が少し安心しているということ

「ふざけんな！！」

俺は銃を乱射する。

今度は叫び声が上がつた。

「くつそが！」

「ここ」で こんなところで捕まるわけにはいかない！

俺は車椅子の少女の体を引っ張つた。

少女の体躯は思つたよりも軽く、持ち上げることができた。

「く……」

少女は抵抗しようとすると、意味なく俺に引っ張られる。

「ルル！」

ご学友と見られる女生徒が、少女の名前を呼んだ。

残念ながらそれでも俺は少女を連れ去つた。

「どうして警察に連絡できただんだ！」

俺は階段を走り降りながら尋ねた。

「不審者だったから連絡しただけですよ」

「は……！？」

「この学校に勝手に入ってきたじゃないですか」

「な……」

「どうということだ！？」

この学校は見学自由じゃ……。

「今日は警備員の人も既に出払つてしまつていますが、この学校は許可なく入つていい学校ではないんですよ」

「そんな……」

驚きつつも俺はそのまま走り続ける。

そこでの青年の顔が思い浮かんだ。あの妙な笑顔……。

だましやがったのか！！

だがそんなことをこの女に行つても仕方がない。

「さらに言えば、私は人の殺氣を感じることができるんですよ」

そう言つて少女は。

先ほどとは違い、ニヤリと嫌な笑みを浮かべた。

瞬間だった。

寒気とともに彼女の足元に目が行つた。

おかしいとは思つたのだ。

足が使えない女を引っ張ると、それはただのお荷物のようになる  
そうだ。だから人質として、足の不自由な奴は使い勝手が悪い。

それを思い出したがもう遅かった。

その少女が一本足で立つていたことに気付いたのも、遅かった。

気づいてすぐに俺は少女の体躯を投げ捨てた。

寒気はすでに通り過ぎていて、恐怖に変わっていた。

「お前、何なんだよ！」

「じゃあ貴方はいったい何でしようか？」

クス、と。

軽い笑い。空気が抜けるようなその笑いは、嘲笑や苦笑に近いもので、しかしそれ以上に恐怖を感じさせた。

もう後は考えるまでもなかつた。

俺はそいつに背を向けて走り出した。

1時間以上走ったのだ。

それでも影はゅうりゅうり、のりうりうりうりと、迫ってきていた。俺の全力疾走にまるで、歩くようなペースで影は追つてくるのだ。

「畜生！畜生！…畜生！…！」

くつそが。

どうなつてこる。

これは一体どうこつことなんだ！！

「いつまでも鬼」つこを続けんですか？それともかくれんぼにでもしましようか？」

女はそう言つて俺を追い駆け続ける。

よくよくみると、一歩一歩で驚くくらい進んでいるようだ。

『縮地』。

それが突然頭によぎつた。

いや、そんなわけがない。あんなの現実にできる奴なんているはずがない。

俺は走り続けた。

どんな道筋を何分走り続けていたのかも覚えていない。外はかなり暗くなつており、月明かりも見られなかつた。そこがどこなのかもしつかり理解はできていなかつた。工場の跡地ということだけは分かつた。

「やはり、かくれんぼの方が正解だつたか……」

あの速さを相手取るには、俺の体力にも限界があつた。だからうまく路地裏やら曲がり角やらを利用して上手く撤いた

「かくれんぼでも私には勝てませんよ」

つもりだつた。

「…………！」

「残念でしたね。私からは逃げられません」

私は鬼ですから。

そう言つて少女は笑つた。

「ところで」

少女は更に続ける。

「貴方はいつたい何者なのかしら？」

「俺は……」

俺は。

俺は銃を取り出した。

「俺は死宣告だ！」

そして弾丸を放つ。

ほぼ距離は1メートル未満。ならば、負けるはずがない。

そう踏んでの行動だつたのだが

「！？」

少女は無造作に腕を振つていた。

いや、俺からすればそれは無造作だつたのだが、彼女の眼は明らかに何かに狙いを澄ましていた。

そしてその狙いが的中したのだろう。

空中で弾丸が真つ二つに切られ、さらにに4等分されて落下した。

「は……！？」

彼女が切つた。

そうとしか考えられないが、そつとは考えにくい。

「な、なにをしたんだ！？」

「今……死宣告つて言いましたか？」

少女は少し怪訝そうに俺を見つめた。

「ああ。この辺一帯の殺人鬼はこの俺

「どうして殺しているの？」

少女はそう言つて俺をにらむ。

「は……！？」

「貴方はどうして、殺人を犯し続けるんですか？」

「……」

動機。

警察官も知らない、俺の殺人の動機。

その意味をこいつは興味本位で知りたいといふことか。  
なら、教えてやろう。

「快樂だ」

「……」

「俺は希望を持っている人間を殺すことに喜びを感じている。俺に  
とつて殺人を犯す理由はそれだけで充ぶ  
ぼどり。」

「ん」

何かが落ちた音に気付いて、俺は左側に視線を向けた。長い棒のようなものがあり、途中が屈折している。そしてその上部には5つの突起が見えた。

え。

いや、この形は。

腕だ。

「う、うああああああああーー！」

俺は自分の左腕がなくなっていることに気付いた。それからすさまじい痛みが体を襲つた。

「適当なことを言わないでください」

「強いて嫌悪の視線を俺に向けていた。

「よく考えればわかるでしょう？ 警察が動機を見つけてないわけがないじゃないですか」

「ああああああああああああーー？」

痛みに叫び続けている。

それでも、こいつの発言に耳を傾けていた。

「どうこうことだ？ つまり、警察は動機を見つけていたといつか？」

「どうして死宣告をされた人は宣告された時点での脅迫された時点で警察に連絡しなかったのでしょうか？」

「あああああーー！」

「逆転の発想です。つまり、なぜ脅迫された時点で連絡しなかったのかを考えのではなく、連絡できない人間とはどんな奴なのか、ということですよ」

少女は俺を見下ろして、淡々と続ける。

俺は脳をかき回して、思考を何度も何度も繰り返す。

つまり、警察と関わることを拒否するような人間

警察に調べられては困る人間。

「ま、さ、か……」

俺は小さな声でつぶやいた。

「そう。宣告された人間 殺された人間は全員犯罪者なんですよ」

「そうか。

そういうことだったのか。

犯罪者は警察に連絡することはできない。だから、警察はいつも死宣告に後れを取っていたのか。

「警察側も、『何者かが犯罪者を殺している』なんていう噂を流すわけにはいかないから、被害者の名前すらも出すわけにはいかなかつたんですよ」

どつかの新世界の神がやぶりとしたようなことが起きるのは現実世界では避けたいことでしょうから。

そう言って少女は自分の言つたことを嘲るように笑つた。

「お前……何なんだよ」

俺は（本当の意味で）決死の覚悟で、少女に問いかける。

「まだわかりませんか？」

「……いや」

正直なところ気づいていた。

死宣告というもののへの異常な依存。というよりは、まるで自分のことのようにすべてを理解している。

つまり

「本物の……死宣告か」

俺は少女を見た。

「ええ

少女はもう一度にやりと笑つた。

その笑みにあつた恐怖は、最終的には、恐怖にまで変わっていた。だが、不思議と今度はそこまで逃げよつとは思わなかつた。なぜなら

「俺はアンタの生き方に憧れた」  
俺は最後の力を振り絞つて宣言する。  
そう。

ここまでくればお分かりだらう。  
俺は所詮、模倣犯だ。  
ただの偽物だ。

「アンタの宣誓して殺人を行うという、その真っ直ぐな姿勢……だからこそ俺は模倣犯になつた」

俺はその少女に向かつて宣言する。

少女は一度目を閉じて、それから口を開いた。

「そうですか。私は犯罪者を殺すだけです。ですが

そう言つて少女は手を開いた。

「お礼と言つてはなんですが、ちゃんと殺します。生きたまま、バラバラにします」

よく見ると、彼女の手には銀色のワイヤーのよくなものがぶら下がつていた。

あれか。

あれで弾丸を切り裂いたんだ。

いや、今わかつてもしようがないし、分かったところでどうにかなる問題でもない。

それにあのワイヤーもただのワイヤーではないのだらう。

「ひつやつて私はバラバラにするんですよ

そう言つて彼女が振り乱すその長い黒髪と銀のワイヤーが俺の最後の景色だった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

死体の横に、宣告通りと書いてから私は立ち上がった。

「貴方もこんなことさえ 犯罪行為さえ行わなければ、我々の組織に殺されることはなかつたんですよ」

我々の組織。

簡単に言えば、犯罪者撲滅組織だ。

私は諸事情によりそこに所属することとなり、諸事情により犯罪者を殺している。

詳しい話は私はしたくないので、省略する。  
まあ誰が聞いていい訳でもないのだけれど。

「それにも」

「……で私は死んだことにした方が本当は都合がよかつたのだけれど……」

「どう伝えたものかしら」

私がそう呟くと

「……」

カラスが工場跡地に入り込んできた。

「何かしら？」

私はそのカラスに話しかけた。

『本部の方に届いた通知だ。マリア様が謹んでお受けしろと言つてゐる』

とカラスは言つて、口に咥えていた封筒を落とした。

私はそれを拾い上げた。

『では私はこれで。こいつは、破壊しておいてくれ』

カラスはそう言つて、ちらりと口の中から通信機を吐き出してから飛び去つて行つた。

私はまず、その通信機を踏みつぶす。

それから封筒を開いた。

「……」

ウー……ウー……

と、サイレンが聞こえた。

ポケットに無理やり封筒を突っ込んで、走り出した。

するとすぐに、街をビルからビルに飛び回る影を見つけた。

「……まさか、『現代のねずみ小僧』の仕業かしら？」

あんな動きが出来る者はほとんどいない。ともすれば。

「殺しましようか。私の手で」

つぶやいてから私もビルの上へと跳躍する。

そして、その影を追い駆けていく。

「は、はあ！？」

影はそう言つて叫ぶ。

「お前、縮地じやねーかそれ！？」

「！？」

初めてだ。こんなに早く私の移動に気付いたのは。

これは……只者じゃない。

「くっそがーー！」

そう叫んで影は消えた。

消えた！？

私は瞬間的に殺氣を探そうとする  
殺氣では見つけられない。

「逃がした……」

まあ仕方がないといえば、仕方がない。  
が、まあまあショックではあった。

「……」

私は静かに、ポケットの紙に手を伸ばした。

『十六夜 縷々（るる） 殿 あなたの入学を心よりお待ちしてお

ります。後世学園『

……後世学園。

「どうしたことか……マリア様に聞いてみなければならぬわね

私は呟いて空を見た。

月はなかつた。

### 3話 殺人（後書き）

序章 A h i e r d k i l l e r  
はこれで終了です。

バトル要素も取り入れれる可能性を残しておきました。

次は  
序章 A p h a n t o m t h e i f  
です。

1話 Dreaming (前書き)

序章 A phantom thief

3月22日だった。

「まーやー！」

さう言つて俺は彼を呼ぶ。彼は眠そうに顔を上げた。

「……何？」

「卒業式の準備。やるぜー。」

俺がそういうと、

「俺がやんなくたつていーじょんよー」

彼はそう言つて、眠そうに顔を上げた。

「お前が居てくれたら、10人楽できるんだよーほり、来いよー。」

「それお前が乐したいだけじゃ

「何のことだか」

俺はにやりと笑つた。

彼は四阿 朔馬 通称『まーや』

彼は異常な少年だった。

体育館に数人で固まつていた集団に混ざる

「よつ！遅かつたな！」

「ああ、まーやが渋つてた

「俺寝てたんだけど……」

まーやはさう言つて、軽く笑つ。

それでもまーやはやる気を出したのか、

「つしやー！任せろ

」と言つて笑つた。

そして、女子が持つていた装飾品を手に取つて、飛び上がる。

彼の異常な点。それは、運動神経。

バスケットゴールのワングの上に立ち、そりにそじを踏み台に2階に上がる。

「いから向こうにつなげばいいんだな？」

と、まーやは言つて今度は壁をける。

そのまま次の足を壁に、そりにその次の足を。

と。

彼は壁を走り出した。

常人ではできない行動。常人ではもちえない筋肉。

彼は備えられるべき力が限界値まで底上げされているのだ。

向こう岸に到着して、飾り付けを済ませる。

「他にやれることあるか？」

「いや、これだけだつたんだよ。ありがとう、まーや

「……これつて本当に俺がする必要あつたのか？」

「楽できて助かつたよ」

「まあいいか

まーやは淡泊にそり言つて、一階から飛び降りた。

「まーや。カラオケ行くか？」

「ゆく！」

まーやは歌が上手い。

そして上手いうえに、特技がある。

まーやと俺と、もう一人友達と一緒にカラオケ店に向かつた。

「？？？」

彼には声色がいくつもあるのだ。

女性アーティストの曲も男性アーティストの曲も、機械音までもできる。そしてデスマタルまで完備。

のどの筋肉がどーのこーのと彼は言つていた。

「昔から、声真似みたいなのが好きだったからなー」「まーやは笑う。

「まーやは何でもできるよなー、スポーツでもなんでも」と、友人の一人が言った。

「おうよ。何でもしたいんだよ。俺は、な

「でーも、人見知りだよなー」

俺はそう言った。

「う……」

「ていうか、恥ずかしがり屋だろ？女子とも話せないじゃん」友達も同意する。

「覚えてるか？一年の時の自己紹介！」

「あー、覚えてるよ！四阿 さきゅまだる？」

「そつそつー皆の前で上がっちゃって、噛みやがってさー。」

「ああ、そつ言えば今年の国体で、助つ人でバスケ部の助つ人してさー。」

「あー、あのダンクショート決めたり、最後にブザービートでエンドラインからゴールまで投げ飛ばしたり！」

「で優勝したのに、最後にみんなに胴上げされそうになつて全力疾走で逃げたりさー。」

「あー、もううつせー。」

まーやは叫んだ。

「何なんだよー！もう帰るぜー！」

「やめるよ。マイクを通して叫ばないでくれよ……」

俺はそう言つて、耳を抑える。

「でも、お前って部活動しなかつたな。何でなんだ？」

「いや、目立つのは好きじゃないんだよなー。」

「でもスポーツ推薦とかもできたかもしれないぜ？」

「いいんだよ。俺は、スポーツなんか二の次で

と、まーやは笑つた。

「へー、じゃあ何があるのか？やりたいことでも

「まーやは笑う。

「あるよ

キーやは呟いた。

「俺、夢あるんだよ

俺には聞き取れなかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0210x/>

---

Stragglers Party

2011年11月7日22時04分発行